

T フジタニ著／米山リサ訳

『天皇のページェント 近代日本の歴史民族誌から』

(日本放送出版協会、一九九四年)

総合政策学部 二年 70801191 江上琢成

ログイン名 s08119te

一 著者の紹介

T・フジタニ (タカシフジタニ、T.Fujitani、ペンネーム表記多様)

1953年、シカゴ生まれ。1975年、カリフォルニア大学バークレー校歴史学部卒業。1980年、同大学歴史学部修士号取得。1983～85年、一橋大学社会学部に留学。1986年、カリフォルニア大学バークレー校歴史学部博士号取得。1987～88年、ハーヴァード大学ライシャワー日本研究所留学。カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校歴史学部助教授を経て、課題書出版時(～早くとも2003年まで)カリフォルニア大学サン・ディエゴ校歴史学部助教授。

専攻、日本近代史・文化史 (課題書241頁、日本の歴史 第25巻『日本はどこへ行くのか』(講談社、2003年)による。)

他の著書・編著

Emperor, Nation, Pageantry: A Historical Ethnography of Modern Japan (課題書刊行当時近刊予定)

Problems in Modernity and Japan's Emperor System (課題書刊行当時近刊予定)

Splendid monarchy: power and pageantry in modern Japan / Berkeley: University of California Press, 1996

Perilous memories: the Asia-Pacific War(s) / edited by T. Fujitani, Geoffrey M. White, Lisa Yoneyama --Durham, N.C.: Duke University Press, 2001

論文

- ① 「近代日本における国家的イベントの誕生」(『夜草』14号、1985年)。
- ② 「近代日本における群衆と天皇のページェント—視覚的支配に関する若干の考察—」(『思想』第797号、1990年)。
- ③ 「近代日本における権力のテクノロジー—軍隊・『地方』・身体—」(『思想』第845号、1994年)
- ④ 「対談・いま、民衆を語る視点とは?—民衆史とサバルタン研究をつなぐもの」(『世界』663号、1999年)。
- ⑤ 「オリエンタリズム批判史としての民衆史と安丸良夫」(安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』(平凡社ライブラリー、1999年(初版は青木書店、1974年))解説)。
- ⑥ 「象徴天皇制の未来について」(日本の歴史 第25巻『日本はどこへ行くのか』講談社、2003年)。

※著者の学界活動は、著作の翻訳作業に規定される(著者のペンネーム表記も多様)。しかし著者の邦訳論文が、岩波書店の雑誌に掲載されていること、日本近代民衆思想研究の代表的研究者・安丸良夫氏との合同研究、日本の歴史 第25巻『日本はどこへ行くのか』への⑥論文の寄稿は、氏が在外日本研究者として、高い評価を得ていることを示している。

二 課題書の研究方法について

- ① 民衆思想の言及…1983年から85年の一橋大学安丸良夫氏のもとの研究が反映（課題書iv,viii頁）。民衆のフォークロア、マイノリティー・グループの抗議など、民衆の抵抗を頻繁に言及。
- ② 歴史的民族誌（エスノグラフィー）…Geertz Clifford 1977 “Centers, Kings and Charisima”, 1980、“Negara”を参照（課題書229頁註）。ギアツに学び、「深い意味などないように見える」記号、儀礼、象徴の重視を継承。ただし文化人類学的手法に規定された、儀礼の通時空間的把握を批判。フーコーに依拠し、個々の儀礼の歴史的特殊性を重視。（課題書29～34頁）
- ③ 監視的権力の重視…1987年ハーヴァード大学留学中フーコー研究、1988年吉見俊哉氏の天皇視線問題の教示が反映（課題書v～vi頁）。ミッシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社、1977年）を参照（課題書228頁註）。訓練・規制される国民の重視。ただし囚人が監視者を見ることができない理論を重視し過ぎているという問題（後述）。
- ④ 想像の重視…Anderson, Benedict 1991 “Imagined Communities”（『想像の共同体』）を参照（課題書228頁註）。ただし天皇が「想像」されたのではなく、「可視化」され続けたという問題（後述）。

三 課題書要約

本書は、近代日本のナショナリズム誕生に際して、天皇の pageant（儀礼的イベント）が果たした大きな役割を明らかにした書である。

まえがき

- ・課題の明示…近代日本のナショナリズムの誕生に公的な国家儀礼が果たした役割の分析を課題。
 - ・先例としての欧米近代式典の重要性…戴冠式、首都（ワシントン、パリ）整備等。日本も共通する見通し。
 - ・課題書成立に至る著者の研究過程紹介
- ① 1983～1985年日本留学。近代日本の国家儀礼の発明と、明治憲法発布（1889年）後の儀式様式変化を分析。前掲①論文発表。
 - ② 1986年博士論文提出。日本の「進歩」的首都・東京と「伝統」的首都・京都との「地景」の役割分担を分析。課題書第二章、第三章に展開。
 - ③ 1987年、ライシャワー日本研究所留学。1988年、吉見俊哉と交流。フーコー研究を視野。近代ナショナリズムと国民の規律・訓練との関連分析。前掲②論文発表。
 - ④ 1988年以降、昭和天皇の病氣報道に見られる、後期日本資本主義とメディアとの関連に関心。課題書第五章に展開。
 - ⑤ 課題書第一章はこの研究の大枠。著者自身が、「まだじゅうぶんに満足できるものとはいえない」と述べているがものの、スタンフォードでの1990年会議発表が基調。

第一章 近代日本の文化的創出—国家のフォークロア—

- ・発明としての近代天皇…近代の天皇は、古代に由来する「伝統的」な存在ではなく、明治の指導者層により発明された近代的産物。しかしこの産物は、被支配的国民のみならず、創造者や指導者にも信じ込まれる（etc 天皇を日本国象徴とする日本国憲法・歴史上の天皇の影響力を自明視する政府高官の発言）。天皇が信奉されなかった過去が「忘却」された原因は、批判者の不存在と、自己の利益として信じる者の存在。
- ・徳川時代の天皇影響力の脆弱性…天皇信奉は、歴史上、連綿と継続されたわけではない。徳川時代、天皇は殆ど一般民衆に知られず。
- ・明治時代のナショナリズム形成…明治政府は、天皇中心のナショナリズム形成、国内の同一性の強調による支配を目標。→徳川時代の、差異（身分制・藩政）の強調による支配を否定。
- ・天皇に関わる祝日や国家儀礼の創造…天皇を民衆に示すため、明治十年まで、頻繁に大規模な巡行。一八八〇年代後半以降は、東京と京都を中心とする公的儀礼が定型化される。
- ・儀礼の「記憶化」…儀礼は自明視、「記憶化」される。夏目漱石ら、多くの人々の、明治天皇死去時の、明治期懐古はその証左。
- ・「地景」の重要性…東京、京都、伊勢神宮という土地が、天皇の儀礼を象徴化。
- ・近代的支配としての文明性要請…近代の支配は、江戸時代までの一般民衆への愚民視を捨象。教育によって一般民衆にアイデンティティや文明性を要請。
- ・「国家のフォークロア」（公式文化）の定型化…政府は、国家による統治を目指し、等質性や包括性を特徴とする「国家のフォークロア」（公式文化）として儀礼を定型化。国家のフォークロアは、民衆の伝統的フォークロア（日常文化）との断絶や、細部の深い意味を示す。

第二章 巡行する天皇と日本の儀礼的地景

- ・首都の重要性…国家には象徴的地景・神聖な場所が必要。首都成立は、十九世紀の国民国家誕生を象徴。
- ・首都成立の遅滞…ただし世界各国の首都成立と比べ、日本は、政府高官が、明治初期二十年間、首都に関して明確な見解を有せず。
 - ：理由①東京遷都は、大久保利通が、天皇と民衆との隔絶を避けるために行った巡行の一環に過ぎず。東京を一時的滞在地たる「行在所」と見なす。
 - ：理由②岩倉具視ら「好古派」が、「伝統」表象を重視した「京都が帝都」の意見。→東京遷都の意図は不明確。東京荒廃。
- ・巡行の影響…巡行における民衆の天皇に関する知識不足露呈。巡行時、民衆は、菊紋が皇室を表象すると知らず混乱。しかし巡行の荘厳さは天皇が社会の中心であることを示す。
- ・東京改造…国会開催や明治憲法発布を前に、福沢諭吉などが、東京改造計画を提案。皇居は、一八八八年十月、明治憲法発布の四か月前に完成（伊藤博文の影響化で、ドイツから輸入の内装を使用）。皇居完成直前、現在の皇居前広場を、公的儀礼と群衆集合のために整備。青山練兵場と上野公園も、軍事的公的儀礼と国家式典のために整備。
- ・巡行が激減（？）…東京改造に伴い巡行激減。背景に、全国学校への真影送付や学校での祝祭日の定着。
- ・儀礼的地景の設定…国家儀礼開催地・東京と、皇室の過去の表象地・京都の相互補完性が定着化。さらに御師制度の廃止により、伊勢神宮から民間信仰の要素を排除。象徴的「場」のネットワークを設定。

第三章 近代国家のページェント

- ・儀礼競争としてのページェント…大巡幸が終結した明治二十年以後のページェントは、「伝統」の強調よりも、西欧列強との対抗意識を基軸にした国際的様式を備える。また台湾や朝鮮に対する優位性や植民地支配国としての特権を構築しはじめる。
- ・天皇の身体の二面性…国内的には、天皇の身体は、京都の伝統性を象徴する「天皇位」と、東京の進歩性や文明性を象徴される物理的な「天皇」の二つを象徴。
- ・東京のページェント…東京開催のページェントは、明治憲法発布など、富国・文明・強兵を示す。銀婚式大祝典は、西洋儀礼習得の象徴として開催。日清、日露戦争時には、軍事的、愛国的表象として、大村益次郎の銅像や大鳥居が製造される。
- ・近代家族像の表象…明治十四年以後、錦絵は、男性的な天皇の姿を描写。皇后の良妻賢母としてのイメージも創造される。天皇夫妻像は、一夫一婦関係を理想とする近代家族像を創出。
- ・京都・西日本のページェント…皇室や国家の過去の記憶を象徴する儀礼は西日本、特に京都で開催。典型例は天皇の葬儀と即位。
- ・明治天皇の死去…天皇が重病に陥ると、儀礼的に、天皇は不朽の天皇位と引き離される。また天皇は、実際に死去しても、生き続けているかのように扱われる。官吏会社員学生や、三十歳以下の者の喪章装着は、近代天皇の支配を自明視し、天皇の死に喪失感を持った人々の存在を示す。
- ・明治天皇の葬儀…明治天皇の葬儀は、皇室の歴史や国家の古さを象徴する京都で施行される。葬送では宮廷装束の着衣により、皇室の過去が演劇化される。ただしこの葬儀は、それ以前にあった仏教的要素を排した点で、近代的産物であることを示す。「明治天皇御大葬御行列詳密図」は天皇の柩と、天皇の肖像の二種の天皇像を描いており、これは天皇の二つの身体像を示す。

第四章 天皇のまなざし

- ・この章は、歴史上、先例がない天皇と国民との視線が論点。
- ・近代の視線①：国民が天皇を見ることの可視化…ページェントは、すべての国民が、いかなる差異も超えて求心性を持つ天皇を見ていることを可視化。さらに天皇は、見えない「超越的主体」へと形づくられる。
- ・近代の視線②：国民が天皇に見られる場面の可視化…ページェントは、国民が天皇を見る場面とともに、国民が天皇に見られる場面を作りだす。後者は、国民自身の規律・訓練につながる点で重要。
- ・軍事的儀礼による規律・訓練の可視化…特に一八八〇年代以降、首都での観兵式など、軍事的儀式が定着。観兵式の図は、天皇を小さく描くとともに、規律される国民を大きく描く。この図は、国民が支配されていることの可視化につながり、また規律と訓練の実効性を示す。
- ・天皇のまなざしの無限性…『風俗画報』第三四〇号の、天皇の視点が見えない図は、天皇のまなざしが無限であることを示す。また凱旋大観兵式の記念絵葉書は、天皇の姿を小さく描くとともに、秩序よく整列した数多くの兵を描き、これにより、天皇の絶対的な力を図示する。
- ・支配に対する民衆の二面性…民衆には、無秩序で、支配に抵抗した者も存在したが（etc ページェントでの「どんちゃん騒ぎ」）、学校や兵舎の規律によって、自身が監視されているという感覚を内面化する者もいる。
- ・近代天皇制分析におけるフーコー理論の有効性…フーコーは、専制君主権と対立する権力として、規律・訓練の権力を重視。しかしフーコーは、目立たないように描かれたルイ14世やナポレオンとの関連で、規律・訓練の権力についても言及している。著者は、これを根拠に、君主制権力の要素を持つ近代天皇制の

分析にも、フーコーの理論が有効であると述べる。また著者は、民主化された主権の理論が、戦前の国体イデオロギーにとってかわったにしても、規律・訓練のメカニズムが現在にまで生き続けているという事実に注目する。

第五章 「象徴天皇」と電子メディア時代のページェント

・「電子メディアのページェント」・大喪の礼…昭和天皇の大喪の礼は「電子メディアのページェント」の到来を如実に示すもの。

・見物人の重要性…大喪の礼は57万人の見物人を集めるものの、見物人が葬列を見ることができたのは一瞬。見物人の重要性は、主体として葬列を見ることよりも、見物人自身の量によって、テレビに対し、天皇支持者の多さを示した点にある。

・テレビの影響

- ① テレビは、イベントの全体像を紹介でき、「現実よりもより現実に近い」世界を作り出せる。
- ② テレビは、私的領域に侵入できる点で国家的イベントを強制できる。
- ③ 政府関係者が、公私における政教分離の差異に留意せねばならないにもかかわらず、テレビは政教の区別の崩壊を助長する。政府が、儀式において宗教色の強い個所を「皇室の私的儀式」と呼んで、公私を区別したにも関わらず、テレビが公私両面を放映できたことは、それを示す。
- ④ テレビは葬送時の日本列島の人々の反応について放映したように、空間を自由に扱うことが可能。その放送は天皇への抵抗感を示す人々や団体の存在を扱いながらも、この葛藤を表沙汰にすることで、それらの人々や団体を懐柔し、さらに無害で役立つものへと変化させる。
- ⑤ テレビが、皇室の作られた「伝統」について、その古さを説明していることは、国民の歴史の記憶を一掃させることにつながる。
- ⑥ テレビは、世の中の主流的解釈である「優先的読み」を求める傾向を持つ。また天皇の葬儀に無関心な者も存在したが、その原因はテレビの陳腐化と支配的物語の深刻さのギャップにある。テレビはそのコピー可能性によって皇威を低下させる。しかし皇室の凡庸化はむしろ、現在の支配的システムを支えることの不可欠の要素となる。

・明仁に見られる「伝統」と「発明」…明仁天皇の即位でも伝統が強調された。しかし、実はその歴史性は捨象されており、テレビも明仁自身が戦後の新しい天皇であることを強調した。

・テレビの影響⑦：皇室の陳腐化…大嘗祭の放送で、テレビは、その秘儀を暴露。このことは、国民に皇室に対する覗き見の快楽を与え、皇室をさらに陳腐化させた。

・皇室の陳腐化とネオナショナリズムの台頭…皇室の陳腐化は、天皇の象徴性の相対化とともに、歴史の集合的記憶を払拭した政治的支配や再軍備化などを招く可能性がある。ポストモダンにおけるネオナショナリズムの存在はそのような不幸な結果を示す。

結び 国家の公式文化と民衆の日常文化

・明治国家が天皇を中心としたページェントを構築してきたことに対する民衆の反応が論点。

・民衆の不適切な反応…一つの反応は民衆が適切に参加していたわけではないということ。①その一例たる新宗教。天理教は東京を繁栄の中心と見なさず、東京や京都以外の地を都と見なした。②天皇のページェントと、従来の祭りとの同一視の頻発。天皇のページェントのために上京する者は、巡礼と同一視。天皇への

賽銭投げは、民間信仰との同一視を示す。

・公式文化の受け皿としての日常文化…しかし宗教的な日常文化が、公式文化の熱烈支持の受け皿となる場合も多数。また一八八九年以降の新しいページェントは、日本全国の人々に国家の時間を共有していると想像させることになり、国民的結合を創出。

・現在の天皇ナショナリズムの問題点…現在の電子メディアのページェントは、天皇と皇室が伝統的であるかのように、儀式を演じているが、これは少数のエリートの夢でしかなく、過去の歴史や国民の差異を忘却させている点で問題点。大喪の礼などに対するマイノリティー・グループの抗議は、その差異の無視に対する抗議なのであり、著者は、日本の人々が国民共同体の自明性を批判する視点を獲得することを呼びかける。

四 課題書の問題点と評価

『天皇のページェント』を批判する研究書として、原武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓』（みすず書房、二〇〇一年）がある。

原氏は、フジタニ氏が、「明治初期には天皇がしばしば全国を回っていたのに、明治二十年代になるとそれが行われなくな」り、「東京が国家の象徴的・儀礼的中心にな」った、と述べたことを問題にする（原、8～9頁）。原氏は、実証的問題として、「東京府内の…行幸の減少」は認めながらも、「地方行幸」は「依然として続けられている」という事実を提示し、これを根拠に批判するのである。

これに関連して、原氏は、方法論上についても二つの問題点を指摘する。

一つはアンダーソンの方法の適用の無効性である。原氏は、明治二十年以後の、近代天皇制の支配が、東京の儀式による「想像」なのではなく、巡行という天皇の「可視化」に依るものだと述べる。その上で、原氏は、フジタニ氏が、「アンダーソンに影響されて…全国レベルの行幸啓そのものが全く行われなくなるという、無理な前提に立っている」（原、10頁）と指摘する。

二つには、フーコー理論の応用の問題である。フジタニ氏は、図画において天皇のもとに訓練された数多くの国民が、「可視化」されていることを強調しているが、原氏は、国民だけでなく、天皇も、巡行により「可視化」され続けていたことを力説している（原、387～388頁）。

ただし、原氏自身が、フジタニ氏を弁護しているように、「明治二十年以降、巡行が減少する」という見解は、遠山茂樹氏から吉見俊哉氏にまで継承されていた定説であった（原、10頁）。原氏の批判を前提としつつ、『天皇のページェント』は、どのような点で、その意義を維持しているであろうか。

第一は、著者の、特に一八八〇年より前の巡行についての認識は、妥当なことである。原氏は、東京でのページェントの影響力は疑問視しながらも、巡行というページェントの影響力についてはフジタニ氏以上に重視している。巡行の影響力を認める点において、両氏には程度以上の差異はない。

第二には、天皇を見たことがない国民の「想像」の有効性である。明治期以後、天皇の巡行を実際に見たことがない者で、天皇の支配を自明視する者は、「想像」した被支配者であるといえる。

第三には、エスノグラフィーによる、象徴の影響の分析である。近代の合理的思考においては、象徴的儀礼は意味が無く見なされる場合がある（etc 皇太子妃雅子はその典型？）。それに対し近代の儀礼の影響力と、ポストモダンに潜む儀礼の問題を論じている点は未だに傾聴すべきである。

第四には、ページェントの陳腐化の陰で進む、政治的支配や再軍備など、近代天皇制とは異なる支配に対する警告である。現在の天皇は、「君が代」斉唱の強制に反対しているが、これとは無関係な場で（あるいは、天皇のハト派的発言の陰で）、改憲論や、公務員の腐敗が現れている。君主制とは別の監視支配が現在も存在するという警告は、依然として学び取るに値すると考える。